

本日は特定16の特祷・聖書日課を用いて礼拝を行うことが定められておりますが、本日の特祷にありましたように、私たちの教会は、主の助けによってのみ健全に立つことができることを改めて覚え、絶えることのない助けをもって主の教会を清め守ってくださるよう祈っています。主イエスと教会の関係を改めて認識し、主イエスが命のパンであること、主イエスに私たちが従おうといつもしているかを改めて問われていることを学びます。

本日の使徒書に選ばれておりましたエフェソの信徒への手紙5章は、夫婦の務めが書かれている箇所として有名であり、聖婚式や結婚式の際には必ず読まれる聖書でもあります。そしてこの箇所は、これから結婚しようとする者のみでなく、すでに結婚している者もその初心を振り返るために時々読み返すことが勧められております。ここでは同時に、主イエスと教会の関係について述べられています。キリストは教会を愛し、教会のためにご自分をお与えになった、そして教会を清めて聖なるものとしてくださった。このようにキリストと教会は切り離すことの出来ない関係にあり、すなわちキリストと教会はいったいであること。そしてキリストが教会に対してなされた業の大きさと恵みの深さについてわかりやすく語られています。そして結婚はこのキリストと教会の関係にたとえることができ、一体とはキリストと教会が一体であるのと同じであるという奥義が示されているのです。私たちの教会を立てられたのはイエス・キリストであり、教会のために完全なそして十分な愛を与えてくださっている、私たちが本日特祷の中で祈りを捧げるキリストの存在は、実に私たちの教会と一体であることを明確に現しているのです。

そして本日の福音書の箇所では、そのキリストをわたしたちがどのように受け止めているか、私たちの教会と一体であるキリストを私たちが本当に信じ、従っていこうとしているかを改めて問われているのです。

特定11の主日、福音書において私たちは五つのパンと二匹の魚で五千人の人々が満腹したという、五千人の給食の話について学びました。主イエスはすべての人々に必要な命のパンについて示すため、この奇跡を行われて天国の力をこの地上に現されたのでした。そしてその次の主日から今日に至るまで、私たちはヨハネによる福音書を通して、命のパンである主イエスについて学んでまいりました。私たちの毎日の生活に必要な肉のパンと共に、命のパンが必要であることを主イエスは示されました。そして二度と空腹になることのない、命のパンを求めその恵みに満たされるものとなるよう招いておられたのです。ところが人々は、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と、肉のパンのみに関心が終始し、命のパンでは腹は満たされない、と永遠の恵みに思いが至ることはなかったのです。そして主イエスのことをヨセフの息子としか見ず、永遠の命へ至る命のパンの与え主として受け止めることはありませんでした。

さらに主イエスはわたしの肉を食べ、私の血を飲むものは永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる、と、聖餐式の恵みについて触れ、この恵みがすべての人に必要であることを示されると共に、永遠の命へ至る道に主なる神が招いておられることを示されたのです。

こうして私たちはマルコによる福音書の五千人の給食の奇跡をスタートに、ヨハネによる福音書を通して、永遠の命に至る命のパンである主イエスについて約一ヶ月の間学んできたのです。

しかし、この主イエスの教えをユダヤの人々はどのように受け止めたのでしょうか。そのことについて触れているのが本日の福音書の箇所です。主イエスには十二弟子意外にも弟子がおられましたので、最初のところに出てくる弟子たちの多くの者というのはこれらの弟子のことをさしているのでありましょう。主イエスに従っている者でありながらも、命のパンである主イエスについて教えが述べられると、こんな話を聞いていられようかとつぶやきました。彼らは永遠の命ではなく、この世的にメリットをもたらしてくれる者として主イエスを見ようとしていたのです。ユダヤの国を他国の干渉から救い出し、主なる神が選ばれた民として、天国の座が約束された者であることが回復されるのを待ち望んでいたのです。言い換えれば、主イエスに対し、目に見えない神の恵みのパンではなく、毎日空腹を満たしてくれるパンを与えてくれるよう、願っていたのです。

しかし主イエスは命のパンについて教えられ、その大切さを受け止める者となるよう招いておられたのです。真理よりも自分たちの都合を優先しようとしていた姿がここに描かれています。

こうして主イエスのもとから大勢の弟子たちが去っていきました。彼らの求める救い主の姿と主イエスが大きく異なっていたからです。自分たちの都合のよい救い主しか認めようとしない、自分たちの好きな救い主を作り出そうとしている彼らに対し、主イエスは大いに悲しまれたことでしょう。そして十二弟子に対しても、あなたがたも離れて行きたいかと言われました。主イエスが深く悲しんでおられる箇所は聖書にいくつか出てきますが、この箇所もまた、主イエスの深い悲しみが私たちの心に迫ってくるのを感じさせられます。しかしペトロは、主イエスは永遠の命の言葉を持っておられると告白し、主イエスを信じていこうという決心を新たにしています。

主イエスの伝道活動は、このように多くの人々に受け入れられず、本日の福音書のように自分の弟子の多くが去っていくという、深い悲しみの中で進められました。しかし十二弟子は、多くの人々が去っていこうとしても、この世的な利益にしかなかったとしても、永遠の命への招きに最後まで従っていこうとしたのです。

聖ヨハネはこの記事を通してわたしたちに、あなたがたも十二弟子のように、たとえ多くの方が主イエスを受け入れようとしなかったとしても、去っていこうとしたとしても、最後まで永遠の命への招きを信じて歩んでいこうとしているのか、十二弟子と同じ決断を、今あなたがた一人一人がしようとしているかを問うているのです。主イエスは去っていこうとする者を止めはしませんでした。主に仕えるのは全き自由であるからです。それは同時に、私たちの日々の生き方が御心に沿っているか、御心にかなう決断を私たちがしているかが絶えず問われていることを現しているのです。耐えることのない助けをもって教会を清め守ってくださった主イエスに、私たちは御心にかなう信仰をもって従って行きたいものです。